

氏 名	平 野 麻衣子
学位(専攻分野)	博士 (教育学)
学 位 記 番 号	博教教甲 第2号
学位授与の日付	2017年9月30日
学位授与の要件	学位規則 (昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	生活習慣形成における幼児の社会情動的発達過程 —相互主体的関係を維持する葛藤に着目して—
論文審査委員	主 査 教 授 小 林 紀 子 副 査 教 授 杉 本 卓 副 査 教 授 早 坂 方 志 副 査 教 授 鈴 木 眞 理 副 査 白梅学園大学大学院特任教授 無 藤 隆

論 文 の 内 容 の 要 旨

平 野 麻衣子

【本研究の目的と意義】

近年、国際的に乳幼児期の教育への関心が高まっており、OECDなどの国際機関において、0～8歳頃までの時期は、人生初期の学び (early learning) の時期として重視され、乳幼児期の教育が生涯学習の基礎となることは、幅広く認知されるところになっている。各国の研究関心は、保育の質の向上にあり、乳幼児の経験内容を様々な人的・物的環境との相互作用において構成されるものとして捉え、関係における相互作用や保育「プロセスの質」を問うことの重要性が指摘されている。また、欧米における長期縦断研究の知見から、将来にわたり教育効果が持続する乳幼児期の社会情動的発達の重要性が認識され、乳幼児の経験内容が社会情動的発達過程へとつながっていく様相を解明することは、幼児教育研究における重要な課題である。

以上を背景に、本研究は、幼児の生活習慣形成場面としての片付けに着目し、幼児が周囲の環境 (人的・物的) とのかかわりの中で、片付けを展開する具体的なエピソード

ドを質的に分析することにより、幼児の経験内容とそれを支える援助プロセスを社会情動的発達過程に着目して明らかにすることを目的とする。従来、幼児期の生活習慣形成は、幼児の実態を可視的発達において調査する研究、保育者からの一方向的な指導実態や方法の検討が行われてきた。

しかし、先行研究において解明されるのは形成された結果としての生活習慣であり、幼児が生活習慣を形成していく過程への着目ではない。また、生活習慣形成を幼児と保育者の双方向的な営みとして捉え、幼児の経験内容を基盤とした生活習慣形成過程を解明することは課題である。

そこで、本研究では、生活習慣形成における幼児の経験内容を人的・物的環境との相互作用を通して捉える社会文化的アプローチの必要性を提示し、経験内容の積み重ねを幼児の発達過程とし、経験内容を支える保育者のかかわりを援助プロセスとして扱い、その解明を行う。具体的には、幼児教育・保育の基本概念である遊びとの関連が深く、幼児と保育者が双方向的な関係において習慣形成を行える片付けに着目する。幼児の存在を片付けという社会文化的な営みに参加し、積極的に生活を創り出していく主体者として捉え、過程において幼児が経験している内容を明らかにする。その際、3歳時期の自律性と自己の発達に着目し、生活習慣形成と社会情動的発達過程とを関連付けて解明することで、幼児の生活の自立の意義を検討する。

研究方法として、1. 歴史的アプローチにより過去の保育実践から生活習慣形成の理論的枠組みを探究 2. 幼児の経験内容を社会情動的発達に着目して捉えるための枠組みとして、自己充実と他者との調和という両義性の視点を置き、対人・対物関係から捉えた実践事例の質的分析 3. 幼児の経験内容を保障する保育カリキュラムの分析・検討 4. 保育者の実際の援助プロセスを保育者の語りと共に情動に着目して分析する。

本研究の意義は、片付けという生活習慣形成を周囲の人的・物的環境とのかかわりの中で捉えることで、生活習慣形成の動的な相互作用の過程を明らかにし、幼児の社会情動的発達過程を解明したことである。幼児が自己充実を基盤に他者との調和を図る社会情動的経験は、自律性や自己の発達を促すと同時に生活習慣形成過程を支えることから、生活の自立において重要な発達経験と捉えられた。それは、包括的な発達の方向性を示す園の保育カリキュラムにおいて保障され、保育者の葛藤を伴う情動的な援助プロセスにより支えられることを明らかにした。

幼児期の教育と小学校教育の接続や学力との関連において、生活習慣の形成結果

のみに着目されている議論に対し、幼児の自律性や自己の発達と関連付けた生活の自立の過程を提案し、社会情動的発達経験に着目した育ちの連続性についての展望を開くことができた。

また、日常の生活場面における幼児と保育者とのかかわりの具体的な様相から、双方の情動的な関係性や保育者の受容・共感的なかかわりの重要性を示すと同時に、幼児の生活の自立を促す相互主体的な関係の重要性を示すことができた。従来、日本の保育実践において大事にしてきた幼児の社会情動的発達経験を生活習慣形成場面において具体的に捉え、教育・保育内容として示すことで、日本独自の保育の質の検証・解明へとつながったと考える。他方、そのような関係性重視の視点は、同質性・異質性の両性をもったかかわりが行えない場合、相互依存的关系へと陥る危うさがあることも指摘し、葛藤を生じつつも相互主体的な関係を維持する過程に保育者の専門性を見出すことができた。

【論文の構成】

本論文は、大きく分けて第Ⅰ部と第Ⅱ部とで構成される。

第Ⅰ部 幼児期の生活習慣形成過程の現代的意義

第Ⅰ部では、幼児期の生活習慣形成過程に着目する現代的意義を分析し、本研究の目的を示した。本研究の目的を実証的に解明するにあたり、歴史的アプローチにより生活習慣形成における理論的枠組みを探究し、倉橋惣三の思想から、幼児の情動的発達を捉える視点、幼児と保育者の関係性の視点を見出した。

序章 研究の背景

序章では、幼児期の生活習慣形成過程に着目する現代的意義を国内外の動向から検討した。まず、国際的な幼児教育研究の動向として、OECDの提唱する保育「プロセスの質」及び社会情動的発達への着目を取り上げ、幼児の経験内容を人的・物的環境との相互作用によって捉え、関係における相互作用やプロセスの質を問うことの重要性、幼児の経験内容を認知的発達と共に社会情動的発達の側面に着目して捉えることの重要性を挙げた。

その上で、幼児期の生活習慣形成を、様々な身体・生理的機能の発達に伴い、生活を遂行するために必要な身の回りのことを自分で行う「身体的自立」と自分でやり遂

げた満足感が自信や意欲へとつながり幼児自らが生活の主人公となっていく「心理的自立」、2つの観点から幼児の生活の自立に向けた課題として捉えた。本研究において、生活習慣とは、毎日の生活を送る中で習慣化された行為を意味する。その中でも生理的基盤に立つ食事、排泄、睡眠の習慣と、社会的・文化的・精神的基盤に立つ着脱衣、清潔の習慣に分けて考え、後者に焦点を当てた分析を行う。

従来、家庭教育においてしつけとして扱われてきた内容であった幼児期の生活習慣は、その形成の場が保育施設へと移行する中で、生活習慣形成を支える保育の営みの重要性が認識されている。また、幼児期の教育と小学校教育の接続や学力との関連において、幼児期だけではなく児童期以降の学びとの関連においてその重要性が認識されている。

しかしながら、近年の研究動向において注目されているのは、形成された結果としての生活習慣であり、幼児が生活習慣を形成していく過程への着目ではない。また、生活習慣形成における幼児の「心理的自立」の実証的検討は行われていない。以上の背景を基に、本研究では生活習慣形成における幼児の社会情動的発達過程を主題とすることとした。

第1章 幼児期の生活習慣形成をめぐる研究の動向と研究の目的

第1章では、まず、先行研究における幼児期の生活習慣形成へのアプローチを幼児期の生活習慣形成と情動発達という2つの視点から分析した。幼児期の生活習慣に関する先行研究は、Arnold L. Gesellの研究に端を発し、わが国では山下俊郎を祖とする幼児の実態調査研究と保育者の指導に関する研究とに大別された。先行研究の成果として、生活習慣形成に関する普遍的な発達法則及び指導法則の発見が行われてきた意義が認められた。課題として、形成された結果としての生活習慣への着目、幼児の生活習慣形成を個人的な行為、ないしは大人からの一方向的な作用として捉えていることが挙げられた。

乳幼児期の情動発達に関する先行研究からは、子どもの情動発達を支える養育者や保育者（特別な他者）の存在の重要性が指摘された。二者間の関係性の推移が自律的な情動調整や自己の発達に大きく影響することが示唆された。特に、他者への依存性を脱し、子どもが自律性を主張し始める3歳時期は、依存と自立の両義的な自己のありようの指摘から「心理的自立」において重要な時期であることが示された。しかし、3歳時期に焦点を当てた情動調整プロセス及び自己の発達過程を他者との関係構築、

関係推移において捉えた実証的研究は行われていないという課題が挙げられた。

従って、本研究では、幼児の生活習慣形成を個人的な行為として捉えるのではなく、人的環境や物的環境との相互作用として捉える社会文化的アプローチの必要性を指摘した。すなわち、幼児（主体）と媒介（人的環境や物的環境）との相互作用を解明するアプローチを採る。また、3歳時期の自律性及び自己の発達に着目し、生活習慣形成との関連において分析する視点を採用することとした。相互作用における経験内容がどのように幼児の社会情動的発達へとつながっていくのかを捉えることで、先行研究において実証されてこなかった幼児の「心理的自立」の意義を検討する。

次に、片付けは、個々の生活の維持と共に他者の生活との関係を考慮する必要性が大きいことから、多分に社会的側面が含まれるという特徴を挙げた。保育学研究において片付けは、幼児の移行経験や保育者の実践知の視点から注目される主題の1つであるが、保育者から幼児への一方向的な社会文化的価値の伝達場面として捉えられ、幼児にとって片付けは、負の感情を抑制し、社会文化的価値を受け入れる営みとして捉えられている。他方、海外研究において、片付けは transition（移行や切り替え）として捉えられ、いかにスムーズに活動を進めていくことができるかという視点でのみ捉えられている。

以上より、本研究は、幼児の生活習慣形成場面としての片付けに着目し、幼児が周囲の環境（人的・物的）とのかかわりの中で、片付けを展開する具体的なエピソードを質的に分析することで、幼児の経験内容とそれを支える援助プロセスを社会情動的発達に着目して明らかにすることを目的とした。

第2章 生活習慣形成に関する理論的枠組みの探求

第2章では、本研究の目的の実証的な解明に先駆けて、過去の保育実践の意義や価値を探る歴史的アプローチを基に、生活習慣形成の理論的枠組みを探求した。ここでの問いは、これまでの研究において、生活習慣形成における幼児の「心理的自立」の意義の検討がなされてこなかったのかという問いである。そこで、生活習慣形成に関する過去の保育実践から、保育カリキュラムへの位置づけを検討し、幼児にとっての「習慣」や「生活」の意味を考察することによって、上記の問いに対する答えを探し、現在の実践を読み解く為の理論的枠組みを探ることとした。わが国の保育の歴史において「子ども」や「生活」に重要な価値を置き、大きな保育の変革が見られた大正期に着目し、その中でも日本の幼児教育の父とも言われ、「生活を生活で生活へ」との

有名なスローガンと共に独自の生活論を展開した倉橋の取り組み・思想に焦点を当てた。具体的には、大正期の倉橋と及川平治の保育カリキュラム編成に着目し、両氏が生活習慣形成をどのように保育カリキュラムに位置付けようとしたのかを分析することで、生活習慣形成に関する思想や原理を考察した。その際、両氏の保育カリキュラムに影響を及ぼしたとされる Patty S. Hill のコンダクト・カリキュラム受容の影響と共に比較分析を行った。

その結果、両氏は共に幼児の生活を出発点とし、生活習慣形成を保育内容として位置づけていきながらも、種々の違いが見出された。それは、幼児の情動的発達を捉える視点と幼児と保育者との関係性における違いとして考察され、生活習慣形成を捉える枠組みとして抽出された。だが、未だ解明されていない課題も挙げられ、この課題が残された背景には、幼児の情動的発達を実証的に捉えることの難しさと指導場面における幼児と保育者との関係維持の困難さという躓きがあったと推察された。そのことが、従来の研究において幼児の「心理的自立」の意義の検討が不十分であったことの要因ではないかと考察された。

この2つの課題を現在において、どのように引き受けていくかという問題に対し、幼児の情動的発達の実証性に関しては、情動発達における重要な他者である保育者との関係性を軸とし、双方の相互作用において生起している情動的な出来事をエピソード記述で捉えることにより可能となると考えた。さらに、乳幼児期における社会情動的発達の教育的効果の知見を根拠に実証性を主張し得ることを挙げた。

一方、幼児と保育者との関係維持の困難さに関しては、従来、欧米型の「相互独立的自己観」との比較において「相互協調的自己観」ないし「相互依存的自己観」が日本を含む非欧米型文化の特徴であるという指摘や文化による子どもの自立の概念の相違を挙げた。日本文化の特徴とされる「相互依存的」な自己のあり方や保育者との関係維持における「心理的自立」の過程を考慮しつつも、多様に変化・変容を遂げている現在の社会状況に鑑みながら、第Ⅱ部の分析を進めていくこととした。

第Ⅱ部 保育の場における生活習慣形成過程の実態

第Ⅱ部では、片付け場面における生活習慣形成過程の実態（3歳児）を捉えた。第2章で検討した倉橋の生活習慣形成思想における「個人的性格と社会的性格」の視点と「幼児の自主と保育者の意図」との結びつきの視点を、社会情動的発達と幼児と保育者の関係性を捉える理論的枠組みとし、残された以下の課題について、片付け場面

の実態から明らかにすることを目的とした。

(1) 個々の幼児の生活習慣形成過程における経験内容

(2) 幼児の経験内容を支える保育者の援助プロセス

片付け場面における幼児の経験内容を第3章では対人関係という視点から、第4章では対物関係という視点から捉え、社会情動的発達過程を明らかにする。

第5章では幼児の経験内容を支える保育カリキュラムを検討し、第6章では保育者の情動という視点から幼児との相互作用の実態を捉え、援助プロセスを明らかにする。

実態を捉える理論的枠組みとして倉橋の枠組みを基盤とするが、その課題を引き受け実際の分析を進めていくために、相互主体的な関係論を提示している鯨岡峻の枠組みを援用することとした。鯨岡の「人間の根源的両義性」に着目し、幼児を自己充実と他者との調和を併せもつ両義的な存在と捉えることを基軸とする。個と社会を対等に捉える点では倉橋と重なるが、片方ではなく双方に意義があるとした点と、幼児だけではなく、保育者をもう一人の主体として捉える主張において、「相互独立的」か「相互依存的」かという二者択一を越え「相互主体的」な関係性を構築することを可能にすると考えた。

それに加え、鯨岡の理論では捉えきれない幼児の自己の発達の方向性を文化的実践の変容と共に状況論的に捉える視点、子どもと保育者の共同注視による相互主体的関係構築の視点を佐伯胖の枠組みから補足的に援用する。

第3章 対人関係の視点から捉える社会情動的発達過程

第3章では、対人関係の中で、幼児がどのような社会情動的経験をしているのかを明らかにすることを目的とした。幼児を自己充実と他者との調和を併せもつ両義的な存在として捉え、自己充実と他者との調和のバランスを図りつつ、どのように片付けという社会文化的な営みへと向かっていくのかという視点から事例分析を行った。

男児の1年間の事例分析から得られた知見は2つある。1つは、幼児の生活習慣形成には、属する社会集団において幼児が自己充実を図る経験が基盤となることである。つまり、幼児は自分の遊びを楽しみ自己充実を図ることにより、他者との調和を求める欲求を基盤に自ら社会文化的な価値を取り込み、生活習慣として形成していく過程を経験している。それは、先行研究において捉えられてきた保育者からの生活習慣指導を受け入れる一方向的な営みではなく、自己充実感を基盤に生活習慣を形成する実態である。

もう1つは、生活習慣形成における社会情動的発達過程は、文脈や状況により変化する、行ったりきたりを繰り返す螺旋状の発達過程の様相を示すことである。幼児が生活習慣を形成していく過程の中では一見すると、停滞や後退とも見えるような姿を見せることもあった。しかしながら、それは他者とのかかわりの中で生活習慣を形成していく過程のダイナミズムを表しており、気持ちの揺れや折り合いという社会情動的経験の積み重ねが、幼児の自律性や自己の発達を促すと同時に生活習慣形成過程を支えることから、生活の自立において重要な発達経験として捉えられることを示した。

第4章 対物関係の視点から捉える社会情動的発達過程

第4章では、対物関係（占有物・共有物とのかかわり）の中で、幼児がどのような社会情動的経験をしているのかを明らかにすることを目的とした。園にある共有物に着目し、幼児が遊びの間、占有物にした物を共有物に戻していく過程を片付けと位置づけ、片付け過程における物とのかかわりの変容過程を明らかにした。男児の1年間の事例分析から得られた知見は2つある。1つは、幼児にとって片付けは、前後の活動と切り離れた行為として捉えられるのではなく、共有物を占有物にする遊び過程と連続する過程として捉えられることである。もう1つは、片付け過程での物とのかかわりには、物を介して他者の意図を読み取り、また自らの物へのかかわりを豊かにしていく経験が含まれるということである。

本研究では、行動面において片付けが習慣化されていると見られる対象児に着目することで、情動的な発達の重要性を指摘することができた。幼児にとって片付けという習慣は、単に使った物を元の場所に戻す行為を繰り返すことで形成されていくのではなく、共有物を媒介に他者の自己充実過程に共感・受容すると共に、自らの自己充実過程も共感・受容される相互理解の中で形成されていくものであること、幼児の相互理解の基盤には自ら物を占有して遊ぶ経験があることを明らかにした。幼児は物を占有したり、共有物に戻したりする物理的な移動を経験しながら、満足感や納得、相互理解や折り合いという社会情動的経験を積み重ねている。それが幼児の自律性や自己の発達を促すと共に生活習慣形成過程を支えることから、生活の自立において重要な発達経験として捉えられることを示した。

第5章 幼児の経験内容を支える保育カリキュラム

第5章では、片付け場面における幼児の経験内容を支える保育カリキュラムを検討

することを目的とした。その結果、得られた知見として、対象園の保育計画は、『幼稚園教育要領』を基準に作成されており、平成元年以降、『幼稚園教育要領』の大綱化という国の方向性が、保育の質の観点の1つである「志向性の質」との関連において意義をもつことが示された。つまり、生活習慣形成における幼児のねらいが行動目標や到達目標としてではなく、包括的な発達の方角性を示すねらいとして設定されることにより、前章までに明らかにしてきた個々の幼児の社会情動的発達経験、つまり、折り合いや葛藤を含む経験内容を保障できるという重要な意義を示した。また、園の柔軟な保育計画が保育者間で共通理解されることで、行動的側面にのみ着目した形式的、一方向的な指導に陥りやすい生活習慣の援助において、眼前の幼児との心理的対話や相互作用を促し、柔軟に対応できる保育者の援助プロセスを成立させていることが考察された。

他方、『幼稚園教育要領』の大綱化は、各園の実践に託される部分が多い反面、各々の保育実践を担う保育者の専門性や実践の質が問われ、保育者も葛藤を抱くことを指摘した。具体的には、眼前の幼児たちとの多様な応答を行いつつ、保育カリキュラムと照合しながら幼児の経験内容を意味付けていくこと、個々の幼児の多様な物語を一つのストーリー上に位置づけ多様な語りが響きあう「多声的な空間」として創り出すことが求められ、そこに保育者の専門性が問われると考察された。

第6章 援助プロセスにみる保育者の葛藤維持

第6章では、片付け場面における幼児の経験内容を支える援助プロセスを明らかにすることを目的とした。第3章・第4章で明らかにした幼児の経験内容について、もう一方の主体としての保育者の視点から描き出し、保育者の情動を伴う援助プロセスの実態を捉えた。前章において、示唆された葛藤の具体的な内容を明らかにし、葛藤を維持する援助プロセスから保育者の専門性についての検討を行った。

従来の研究において、片付けは、社会文化的価値を幼児が受動的に受け入れ、負の気持ちを制御することで習慣化されていくと捉えられてきた。実践においても、幼児にとって片付けは負の気持ちを抱くものという前提の下、楽しい雰囲気や新たな楽しみ方を提示することで負の気持ちを抱かせないようにする手法や、負の気持ちを感じる隙間も与えないように、時間で区切り片付けすべき時間として割り切る手法が用いられることが多かった。このことは、保育者にとっても揺らぎや葛藤を感じることなく、スムーズに片付けを展開することへとつながってきていたといえる。

しかしながら、本研究では、保育者をもう一方の主体とし、連続した生活を共にする「生活者」として捉えることで、保育者自身も心を碎き、手応えや葛藤を感じながら子どもと共に意味を生成していく情動的なプロセスを明らかにすることができた。

具体的には、援助プロセスにおいて保育者が抱えていた主な葛藤を2点挙げた。1つは、個々の幼児の自己充実過程に寄り添い続ける葛藤である。片付け場面において、保育者は、個々の幼児の遊びに共感・受容しながら幼児理解を深める、他方で時事刻々と変容するその幼児の“今”を捉える中で幼児理解の再構築を図りながら、個々の自己充実を支え続けることが求められていた。

もう1つの葛藤は、個々の幼児の他者との調和を図る過程を見守る中での葛藤である。保育者側から他者との調和へと誘う意味ももつ片付け場面において、保育者は、誘い方を工夫しながら、幼児の中にある他者との調和を求める欲求に響く援助を模索し、保育者の提示した社会文化的価値に対して、幼児が自分の中で意味づけ、必要性を理解し統合するまでの過程を隙間づくりや温かい眼差しで支える援助を行っていた。保育者は常に幼児の情動的变化を捉え、自身の援助のさじ加減について慎重に吟味しながら、幼児が自分の中で他者との調和を図る過程を見守ることが求められていた。

葛藤状態において、保育者は幼児とのやりとりの中で得られた手応えを基盤に、自らの幼児理解や援助を省察できるゆとりや幼児と共に楽しむ遊び心をもって応じていた。また、保育者同士で互いの状況を想像し、補い合い、支え合うことで状況を変換させ、柔軟に対応する中で葛藤を維持していた。幼児の自己充実と他者との調和を片方ではなく、常に双方の充実を支えるからこそ生じる保育者の葛藤が、幼児と保育者との相互性や相互主体性を担保することも示唆され、葛藤維持プロセスに保育者の専門性を見出すことができた。

終章 幼児の社会情動的発達過程を支える相互主体的関係

終章では、本研究の結論と今後の課題を整理した。各章の総括を行い、研究全体を通した主な成果と、先行研究および今後の研究や実践に対する意義を3つ示した。

1つ目は、幼児の生活習慣形成における遊びを軸にした自己充実の重要性を指摘したことである。先行研究において、生活習慣形成場面は、社会文化的価値の伝達場面として捉えられ、幼児にとっては、感情を抑制して社会文化的価値を受け入れる営みであるとされてきた。それは、情動を自己制御できる3歳時期の発達を背景に、子ど

もの自己のありようや保育者のかかわりの質を問うことなく、援助における社会文化的価値やルールのみが強調されてきた結果といえる。

しかしながら、本研究では、幼児を自己充実と他者との調和を図る存在として捉え、社会情動的発達に着目して分析することにより、自己充実感を基盤に、幼児自ら他者との調和を図り自律的に生活習慣形成を行う実態を明らかにした。つまり、幼児の自己充実と他者との調和、双方の充実に目を向け、相互主体的な関係において支えていくことで、幼児が自律性を獲得し、生活の主体者としての自己を築くと同時に、生活習慣を形成していく過程が明らかになった。片付けという生活習慣形成には、幼児が様々な媒介を使用しながら自分で情動調整を図る主体としての基盤を育む重要な経験内容が含まれている。このことは、保育者が社会文化的価値を含む他者との調和ばかりを強調し、教え、内面化させようとする従来の指導に対して幼児の経験内容に基づいた主張ができるものと考ええる。

2つ目として、幼児の生活習慣形成における納得や相互理解、折り合い等の社会情動的経験の重要性を示すと共に、螺旋状の様相を有する発達過程を明らかにしたことである。先行研究においては、身の回りのことを自分で行う身体的自立のみが強調され、発達段階に応じた一方向的な生活習慣形成過程が仮定されていた。

しかしながら、本研究では、子どもの自己の発達や自律性と生活習慣形成を関連づけて分析する視点を採用し、3歳時期の個別の幼児の社会情動的発達過程を分析することによって、停滞、あるいは後退をも含む螺旋状の様相を明らかにした。つまり、自立と依存を繰り返しながら自己を発達させ、自律性を獲得していく様相と生活習慣形成過程を関連付けて捉えることができた。このような視点は、保育施設における集団画一的な生活習慣指導に対する疑問を投げかけると共に、個別の発達過程に合わせた援助の重要性を主張できるものと考ええる。また、生活習慣形成を過程において捉え、長期的な視野をもって見守ることの意義は、形成結果において生活の自立を捉える昨今の幼小接続の議論や保護者の育児不安に対する一考となり得るのではないかと考える。

3つ目として、生活習慣形成における幼児の経験内容は、包括的な発達の方向性を示す園の保育カリキュラムにおいて保障され、保育者の葛藤を伴う情動的な援助プロセスにより支えられることを明らかにしたことである。先行研究において、生活習慣の指導には、習慣形成の条件である反復・動機付け・成熟を整えることが必要とされ、保育者からの一方向的な指導方法が検討されてきた。また、歴史的考察から明らかに

したように、保育カリキュラムにおける生活習慣形成のねらいが、行動目標や到達目標として位置づけられることによって、行動的側面にのみ着目した形式的、一方向的な指導に陥ることも多かった。

しかしながら、本研究では、生活習慣形成を幼児と保育者が共に生活を創り出す文化的な営みとして捉え、その実態を双方の視点から描くことで、相互主体的な関係構築の重要性を指摘することができた。特に、幼児の社会情動的経験内容に目を向け、個々の自己充実に寄り添い支え続けると共に、常に他者との調和を見守り続ける保育者の両義的な営みにおいて、抱える具体的な葛藤内容を明らかにできたことは、大きな意義と考える。

近年の片付け研究においても、幼児の気持ちと保育者の意図との間での葛藤への着目があったものの、本研究では、日々連続する生活を共にする「生活者」としての立ち位置からの様々な葛藤を明らかにし、倉橋の取り組みにおいても課題とされた幼児と保育者との関係性に関し、「向かい合うかかわり」と「横並びのかかわり」という立ち位置が組み合わされることで、程よい距離感が保たれ、関係性の保持に基づく援助プロセスとして示すことができた。保育者が自身を媒介とする場合や物・状況を媒介にできるよう調整する場合があったが、幼児にとって媒介が同質性・異質性の両性をもったかかわりとして機能できるように働いていた保育者の援助プロセスに、専門性を見出すことができた。

一方向的な指導に陥りやすい生活習慣形成において、保育者も幼児の両義的な育ちを保障する上での葛藤を抱くこと、その葛藤維持過程が相互性を担保する可能性も示唆された。葛藤維持過程への着目により、従来、指摘されてきていた日本の文化に特徴的な相互依存的な自己のあり方に対して、相互主体的な関係の重要性を指摘し、その関係を基盤に行える「自立」についての検討を進めることができたと思う。

今後の課題として、以下の点を挙げた。まず、本研究では、対象年齢を3歳児と設定したため、その検討は幼児と保育者との相互作用を中心とするものとなった。今後は、他関係の様相の解明、例えば、保育者以外の友達関係や異年齢の子どもとの関係、物の集合体としての園環境を捉える視点や不可視的環境（音や時間、雰囲気等）への着目、養育者・家庭内環境との関係や生活の連続性に着目した解明を進めることで、子どもの社会情動的発達のさらなる解明を進め、育ちの連続性についての検討を行うことが課題である。そのためには、3歳児以前、以降を対象とした長期縦断研究が必要となる。

また、本研究では、対象園1園の援助実態を実際の援助分析、保育者の語り分析、園の保育カリキュラム分析と様々な分析方法で捉えることにより、幼児と保育者との関係を共に生活を創り出す「生活者」としての立ち位置、保育者の受容・共感的かかわりの重要性を示すと共に、葛藤を維持するプロセスに保育者の専門性を見出すことができた。しかし、1園の実態であることには限界もあり、異なる保育形態や保育者集団の構成、保育カリキュラム方針、園文化等をもつ園や施設へと分析対象を広げ、横断的に比較検討していくことが課題である。特に、生活習慣形成において生じる保育者の情動的援助プロセスを支える要因として、例えば、保育者間の関係性や園組織のありよう、実践における知恵等に着目することで、具体的に援助を実践に移していく際の手立てや指針を導き出すことができると考える。そのことは、感情労働とも言われ、チームとしての組織やリーダーシップの在り方が問われている中での保育者の専門性構築、及び維持の検討につながると考える。

本研究では、生活習慣形成をテーマとしつつ、社会的習慣としての特徴を持つ片付けに着目したが、他習慣の形成実態や形成過程を捉えると共に、各習慣間の関連性の検討や生活習慣の全体構造を解き明かしていく中で、幼児にとっての生活習慣形成及び生活の自立についての検討を深めていくことが最終的な課題である。

審 査 の 結 果 の 要 旨

平野麻衣子氏より提出された博士学位申請論文についての審査結果を以下に報告する。

【論文の性格と特徴】

本論文は、生活習慣形成における幼児の社会情動的発達過程を明らかにした論文である。幼児の能動性及びコミュニティー参加過程としての発達、幼児の経験内容を構成する人的・物的環境との相互作用への着目から、生活習慣形成における社会文化的アプローチの必要性を提示している。具体的には、幼児教育・保育の基本概念である遊びとの関連が深く、幼児と保育者が双方向的な関係において習慣形成を行える片付けに着目している。幼児が生活の主体者として、周囲の環境（人的・物的）とかかわり、片付けを展開する過程において、幼児の経験内容とそれを支える援助プロセスを社会情動的発達過程に着目して明らかにすることを目的とした論文である。

目的の解明にあたり、歴史的アプローチによる生活習慣形成の理論的枠組みの探求、対人・対物関係から捉えた実践事例の質的分析、幼児の経験内容を保障する保育カリ

キュラムの分析・検討、保育者の情動に着目した援助プロセス分析という研究方法を複合的に組み合わせていることに特徴がある。

【論文の構成と概要】

本論文は、第Ⅰ部と第Ⅱ部とで構成されている。第Ⅰ部は、幼児期の生活習慣形成過程の現代的意義を分析し、本研究の目的を示すと共に、歴史的アプローチにより生活習慣形成における理論的枠組みを見出している。

序章では、幼児期の生活習慣形成過程に着目する現代的意義を国内外の動向から検討し、研究の背景について述べている。国際的な幼児教育研究の動向を踏まえ、幼児の経験内容を人的・物的環境との相互作用によって捉え、関係における相互作用やプロセスの質を問うこと、及び幼児の経験内容を認知的発達と共に社会情動的発達の側面に着目して捉えることの重要性を挙げている。その上で、近年の幼児期の生活習慣形成に関する議論において、生活習慣形成過程への着目と幼児の「心理的自立」の実証的検討がなされていないことを指摘している。

第1章では、先行研究における幼児期の生活習慣形成へのアプローチを2つの視点から分析し、本研究の目的を示している。1つは、幼児期の生活習慣形成に関する先行研究の課題として、形成結果としての生活習慣への着目、幼児の生活習慣形成を個人的な行為、ないしは大人からの一方向的な作用として捉えていることである。もう1つは、乳幼児期の情動発達に関する先行研究からは、乳幼児の情動発達を支える養育者や保育者の存在の重要性が指摘されているが、課題として、3歳時期に焦点を当てた情動調整プロセス及び自己の発達過程を他者との関係構築、関係推移において捉えた実証的研究は行われていないことを挙げている。これらのことから、本研究のアプローチとして、幼児の生活習慣形成を人的環境や物的環境との相互作用として捉える社会文化的アプローチの必要性を指摘し、3歳時期の自律性及び自己の発達と生活習慣形成とを関連づけて分析する視点の採用を挙げている。具体的な対象として、社会的側面が含まれる片付けに着目し、幼児と人的・物的環境との相互作用を社会情動的発達に着目して明らかにすることを目的としている。

第2章では、本研究の目的の実証的な解明に先駆けて、過去の保育実践の意義や価値を探る歴史的アプローチを基に、生活習慣形成の理論的枠組みを探求している。具体的には、大正期の倉橋惣三と及川平治の保育カリキュラム編成に着目し、Patty S. Hill のコンダクト・カリキュラム受容の影響と共に、両氏が生活習慣形成をどのよう

に保育カリキュラムに位置づけようとしたのかを比較分析している。その結果、幼児の情動的発達を捉える視点と幼児と保育者との関係性における違いを見出し、生活習慣形成を捉える枠組みとして抽出している。一方で、未だ解明されていない課題も挙げられ、その背景に、幼児の情動的発達を実証的に捉えることの難しさと指導場面における幼児と保育者との関係維持の困難さという躰きを推察し、先行研究における幼児の「心理的自立」の意義の不十分な検討に関する要因として示している。

第Ⅱ部では、第2章で検討した倉橋の生活習慣形成思想における「個人的性格と社会的性格」の視点と「幼児の自主と保育者の意図」との結びつきの視点を社会情動的発達と幼児と保育者の関係性を捉える理論的枠組みとし、残された課題（1）個々の幼児の生活習慣形成過程における経験内容の解明（2）幼児の経験内容を支える保育者の援助プロセスの解明について、片付け場面における生活習慣形成過程の実態（3歳児）から明らかにしている。

第3章では、対人関係の中で、幼児がどのような社会情動的経験をしているのかを明らかにすることを目的とした事例分析を行っている。社会情動的経験を鯨岡峻の「人間の根源的両義性」の視点から捉え、佐伯胖が図式化している「学びのドーナツ論」を補足的に援用しながら、社会情動的発達過程の解明を行っている。その結果、幼児の生活習慣形成には、属する社会集団において幼児が自己充実を図る経験が基盤となること、生活習慣形成における社会情動的発達過程は、文脈や状況により変化し、行ったりきたりを繰り返す螺旋状の発達過程の様相を示すことを明らかにしている。

第4章では、対物関係（占有物・共有物とのかかわり）の中で、幼児がどのような社会情動的経験をしているのかを明らかにすることを目的とした事例分析を行っている。園にある共有物に着目し、幼児が遊びの間、占有物にした物を共有物に戻していく過程を片付けと位置づけ、片付け過程における物とのかかわりの変容過程を明らかにしている。その結果、幼児にとって片付けは、前後の活動と切り離れた行為として捉えられるのではなく、共有物を占有物にする遊び過程と連続する過程として捉えられること、片付け過程での物とのかかわりには、物を介して他者の意図を読み取り、また自らの物へのかかわりを豊かにしていく経験が含まれるということを明らかにしている。

第5章では、片付け場面における幼児の経験内容を支える保育カリキュラム分析を行っている。対象園の柔軟な保育計画により、行動的側面にのみ着目した形式的、一方向的な指導に陥りやすい生活習慣の援助において、眼前の幼児との心理的対話や相

相互作用を促し、柔軟に対応できる保育者の援助プロセスを成立させていると考察している。『幼稚園教育要領』の大綱化との関連において、生活習慣形成における幼児のねらいが包括的な発達の方角性を示すねらいとして設定されることにより、個々の幼児の社会情動的発達経験を保障できる意義を示している。他方、『幼稚園教育要領』の大綱化は、各々の保育実践を担う保育者の専門性や実践の質が問われ、保育者も葛藤を抱くことを指摘している。

第6章では、片付け場面における援助プロセスを保育者の情動に着目して明らかにすることを目的とした事例分析及び保育者の語り分析を行っている。その結果、援助プロセスにおける保育者の葛藤として、個々の幼児の自己充実過程に寄り添い続ける葛藤と個々の幼児の他者との調和を図る過程を見守る中での葛藤の2点を挙げている。従来、保育者にとっても揺らぎや葛藤を感じることもないスムーズな片付けの展開が指向されてきた先行研究に対し、保育者をもう一方の主体とし、連続した生活を共にする「生活者」として捉えることで、保育者自身も心を碎き、手応えや葛藤を感じながら維持していく葛藤維持プロセスに保育者の専門性を見出している。

終章では、研究全体を通した主な成果として、以下の3点を挙げている。(1) 幼児の生活習慣形成における遊びを軸にした自己充実の重要性、(2) 納得・相互理解・折り合い等の社会情動的経験の重要性、(3) 幼児の経験内容を支える包括的な発達の方角性を示す園の保育カリキュラム及び保育者の葛藤を伴う情動的な援助プロセスの重要性である。今後の課題としては、(1) 子どもの社会情動的発達のさらなる解明を進め、育ちの連続性についての検討を行うことが重要であるため、3歳児以前、以降を対象とした長期縦断研究の必要性、(2) 異なる保育形態や保育者集団の構成、保育カリキュラム方針、園文化等をもつ園や施設へと分析対象を広げ、横断的に比較検討していくことが求められるとしている。

【論文の意義と評価】

本論文は、現代の幼児教育・保育において重要な課題である生活習慣形成に関して、先行研究における保育者からの一方向的な指導としての捉えに対し、相互主体的な関係を基盤とする「心理的自立」の過程を示唆することに成功している。それは、過去の保育実践においても目指されていた幼児の内面の発達を社会情動的発達として捉え、「自己充実と他者との調和」という枠組みを用いた事例分析により、明らかにすることができたことによる。また、生活習慣指導場面における幼児と保育者の関係維

持の困難さに対して、保育者の葛藤維持プロセスに着目することで、同質性・異質性のかかわりによる相互主体的な関係構築を明らかにすることができたことによる。国内外の幼児教育・保育研究において、保育「プロセスの質」が問われる現在、日本文化の特徴とされていた相互依存的な関係に対して、保育者の受容・共感的なかわりと共に、相互主体的な関係構築の重要性を示すことにより、保育の質の向上への示唆を得ることができたと評価できる。

以上、先行研究を十分吟味した上で先行研究以上の新たな独自の知見を示していること、また多種の研究方法を複合的に組み合わせた独自性のある研究方法を採用していること、今後の研究への十分な発展性を備えていることを総合的に評価し、審査委員一同は全員一致で平野氏の論文が博士の学位を授与されるにふさわしい論文であると判断する。

2017年 6 月15日

主 査	教育人間科学部教授 小 林 紀 子
副 査	教育人間科学部教授 杉 本 卓
副 査	教育人間科学部教授 早 坂 方 志
副 査	教育人間科学部教授 鈴 木 眞 理
副 査	白梅学園大学大学院特任教授 無 藤 隆